



## 祈りの道

修験者や僧侶たちは、自身の修行のため、そして体得した教えを世に広めるために、日本各地を旅しました。また、各地の御師(おし)や神人(じにん)といった神道系の宗教者たちも、自分たちの檀那場(だんなば)を巡って信仰を広めました。平安時代中期(10世紀頃)以降、こうした宗教者たちの動きに呼応して、熊野詣や西国巡礼などをはじめとする寺社参詣が、貴族の間で広く行われるようになります。

時代が下り、交通網の発達、戦乱の終息と経済力の向上など社会・経済の発展に伴い、上流階級に限られていた参詣の旅が、民衆の間でも行われるようになりました。江戸時代、他所への移動は原則として禁じられていましたが、参詣の旅は比較的容認されていたため、伊勢神宮を目指す「お伊勢参り」をはじめとした寺社参詣を目的とする旅を楽しむ姿が記録に残されています。

庶民にまで旅が広まったとはいえ、旅をするためには多額の費用が必要であり、誰もが気軽に出かけられるものではありません。そのため、「講」と呼ばれる信仰集団を組織し、旅行費用を積み立て、講員の中から代表者を選んで参詣をする「代参」がよく行われました。

寺社参詣の旅とはいえ、各地を

見聞することも旅の大きな目的でした。名所を訪ね、その土地の美味しいものを食べる。祈りの旅は物見遊山の旅と表裏一体でもあったのです。各地の旅行記や案内書、例えば「弥二さん喜多さん」で有名な十返舎一九(じっぺんしゃいっく、1765年-1831年)の『東海道中膝栗毛』、仮名垣魯文(かながきろぶん、1829年-1894年)の『身延参詣甲州道中膝栗毛』のような旅をテーマとする文芸作品が盛んに出版され、こうした書物がさらに人々を旅へと駆り立てたのです。甲斐国では身延山や富士山などが祈りの道の目的地となり、多くの人々が訪れてきました。

他にも、多くの祈りにまつわる道があります。修行の道や祭祀の道、あるいは人馬の往来を見守った道端の素朴な石仏や道祖神にも、人々の祈りが込められています。こうした“祈りの道”を歩きながら、甲斐国に生きた人々、訪れた人々の豊かな“心のうち”を思う旅もまた「やまなし歴史の道」を行く楽しみだといえるでしょう。



七面山から望む赤沢地区

## 甲斐国への“祈りの旅”

### ●身延詣

身延山は日蓮聖人(にちれんしょうにん、1222年-1282年)が入山したことから始まる霊地です。日蓮宗の開祖である日蓮聖人は、鎌倉幕府や諸宗派を批判したとして佐渡へ配流されましたが、赦免後に信者の一人である波木井実長(はきり(はきい)さねなが、1222年-1297年)に招かれて身延山に入山します。その後、身延山を信仰の場の中心に据え、晩年を弟子の指導に費やしました。その弟子たちは、日蓮宗の根本経典である法華経の守護神・七面大明神を祀る七面山への道を拓き、さらなる修行を重ねたといいます。日蓮聖人と弟子たちが生み出した道や、甲州街道や河内路といった身延山に向かう道は、近世以降は人々が身延詣に往来して大いに賑わいます。門内には商店街が生まれ、数珠や仏具を扱う店をはじめ、参詣者を支える宿や飲食店、土産店、日用品店まで並び人々が行き交いました。身延山と七面山の間にある赤沢(早川町)は、七面山登拝の重要な講中宿場として栄え、強力(ごうりき)や駕籠人足、旅籠などが営まれました。

### ●富士信仰

荒々しい噴火活動を繰り返す富士山には、古くから神仏がおわすと考えられていました。噴火が収まると、まず修験者たちが富士山への信仰登山を行うようになりました。戦国時代末期(16世紀末)、長谷川角行(はせがわかぎょう、1541年-1646年?)という宗教者により「富士講」の基礎



「富士山神宮并麓八海略絵図」(山梨県立博物館蔵)

が作られます。富士講の教えは庶民の現世利益的な要求に応えるものであったため、「江戸八百八町に八百八講」と言われたほど多くの富士講が組織され、多くの江戸庶民が富士道を歩いて富士山頂を目指しました。

富士講信者を出迎えたのが御師と呼ばれる宗教者です。夏の間、御師は自宅を開放して富士講信者に宿を提供し、食事や不浄祓いの祈祷、登山の案内などの世話をしました。冬場には、各地の富士講の元へと足を運んで富士信仰の布教に努めました。富士山の麓には多くの御師宿坊が軒を連ね登拝拠点の街として発展します。